

神奈川県イヌケホシダについて

岡 武 利

Taketoshi OKA: Notes on *Thelypteris dentata*
(FORSKK.) ST. John in Kanagawa Prefecture

はじめに

イヌケホシダ *Thelypteris dentata* は暖帯から熱帯にかけて分布するヒメシダ科のシダで、ホシダに似ているが、全体に毛が多いことや、根茎が直立または斜上することなどでホシダと区別できる。

神奈川県においては、1980年10月に藤沢市川名で筆者が採集したのが最初の記録と思われる。この時の標本は、「日本のシダ植物図鑑」第3巻（倉田・中池，1983）に引用された。

その後、神奈川県における本種の報告は見当たらなかったが、最近、宮崎卓氏により川崎市多摩区で自生が確認され（宮崎，1992）、筆者も分布について若干の新知見を得たので報告する。

本種はホウライシダなどと同様に、温室などから逸出することが知られ、日本シダの会報に静岡県で温室から逸出した例（志村，1971）や、和歌山県では標本庫から孢子が飛散して野生化したと思われる例（真砂，1976）などが報告されている。

本県の産地も、従来から知られていた紀伊半島などの自生地から著しく隔っているので、分布の由来についても若干の考察を試みた。

1. 藤沢市川名

1980年10月、水田の土留め用コンクリート板の隙間などに、ホシダと混生している本種が目にとまった。全長20cmから40cmのものが数株見られた。意外なシダの出現に驚き、逸出ではないかと思い付近を調べたが、周囲は多少民家があるだけで水田と丘陵が広がり、どこから逸出したのか確認できなかった。

同所のイヌケホシダを数年にわたって観察したところ、冬季は葉が枯れるが、晩春には新葉を展開し、越冬していることが確認された。わずかずつではあるが年々株数も殖えていた。1988年11月までは健在だった

が、この頃から付近で宅地造成が始まり、1989年10月に現地を訪れた際には、水田は埋め立てられ、この自生地は消滅した。

2. 高座郡寒川町寒川神社および宮山神社

1989年1月、寒川神社境内の池の周囲の石垣に数株、さらに、同神社の西隣にある宮山神社の掘割の石垣にも20株余りの本種が生育しているのを見いだした。両自生地ともに日当たりの良い南向きの石垣で、上部をクスノキやシイ類などの常緑樹に覆われ、厳寒期においても降霜から守られていることが窺えた。宮山神社では図2のように掘割の水面に近い所に生えており、掘割の水温が本種の生育に好影響をもたらしているのかもしれない。ここのものはとくに生育が良好で全長80cmに達するものがあった。

1993年11月と12月に付近を調査したところ、宮山神社から300m西にランの栽培温室があり、温室にはシンビジウムの鉢植が一面に並んでいたが、イヌケホシダは見られなかった。温室の持主によれば、ランの栽培を始めて約20年になり、かつては雑草が生えて困ったが、最近除草剤を撒いているので雑草はほとんど見られない、とのことであった。シクラメンやスイートピーを栽培している温室もあったが、同様で、イヌケホシダはおろか雑草の類は全く見られなかった。しかし、宮山神社における本種の旺盛な生育状況や継続的な観察の結果から判断して、孢子が飛来してから優に10年は経過していると思われ、除草剤などが現在ほど使われなかった時代に、付近の温室から逸出した可能性が大きいのではないかと考えられた。

3. 藤沢市南藤沢

1990年12月に国道467号線沿いの石垣に着生している本種を発見した。高さ約4mの東向きの石垣に、タ

チシノブ、イノモトソウ、イヌワラビなどととも約30株が点在していた。イノモトソウやイヌワラビは石垣の上部にも生えていたが、イヌケホシダは主として地上から1m以内の所に生育していた。

この石垣は東向きで上部を覆うものではなく、イヌケホシダの生育する環境としては不適と思われた。ところが、同所は東西に走る国道の両側をビルの壁面とイヌケホシダの生える石垣で挟まれ、南北はJR東海道線のガードと図3に見られる陸橋によって囲まれているため、寒風などはかなり遮断されるであろうことが想像できた。しかも、絶えず自動車が通行し、排気ガスなどによる放熱と相俟って温室効果が生じ、かろうじてイヌケホシダが生き延びられる環境となっているのではないかと推測された。同所の個体は全て小形で、最大のもので全長20cm、多くは10cm以下であった。

この群落のルーツを探索したが、この辺りは商店やビルが立ち並ぶ市街地で、イヌケホシダの孢子が飛来しそうな温室などは見当たらなかった。同所より4km南にある江の島植物園からの逸出も考えられたので、1993年11月に同園内外を調べた。その結果、植物園の温室内にイヌケホシダの幼株が数株見られたが、それ以外は植物園の内外を問わず、江の島では全く見つからなかった。藤沢市川名や南藤沢の産地よりも温暖で、ホウライシダやナチシケシダが豊産する江の島に全く見られず、突然上記産地に出現することは、微細な孢子であるから全く可能性がないとはいえないが、やはり考えにくい。むしろ、寒川方面から孢子が飛来してきた可能性が大きいのではないだろうか。しかりとす

れば、寒川町と南藤沢の中間地帯にも本種が分布している可能性が大きい。

4. 横浜市中区山手町

本稿を執筆中に、横浜でも本種が採集された旨、北川淑子氏からお知らせいただいた。1993年12月に発見者の山田文雄氏から筆者宛てに、同氏が1993年11月16日に採集された標本を送っていただき、検したところ、紛れもなくイヌケホシダであった。筆者は現地を確認をしていないが、確実な産地と判断されたので、山田氏のお許しを得てここに取りあげた。筆者自身も近々現地の確認を行う予定である。

山田氏の調査結果によれば、自生地は、バス道路に面した南東向きの民家の石垣で、高さ1m20cm、長さ3mの範囲に、トラノオシダ、イノモトソウ、ハキダメギクなどととも、大小21株が生育していたそうである。地上から60cm以内の低所に多く見られ、葉長は最大で30cm、多くは20cm以下の小形品とのことであった。付近には温室などは見当たらなかったとのことであるが、学校や外人の住宅が多い所でもあり、その辺りから逸出した可能性があるのではないかと思われた。なお、「神奈川県植物誌1988」(秋山ほか、1988)にはイヌケホシダは記載されていない。上記4ヶ所の自生地は、恐らく逸出起源であろうが、一時的なものではなく、再生産を繰り返していることが確認できた。神奈川県産植物として認知しても差し支えないだろう。本報をまとめるにあたり、文献や新産地についての情報を提供くださった北川淑子氏、ならびに貴重な標本を恵みくださり、新産地の発表を許された山田文雄氏に深く感謝申しあげる。

文 献

- 秋山 守・守矢淳一・山本 明, 1988. シダ植物. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌1988, pp. 60-161. 神奈川県立博物館.
- 倉田 悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑 3. 東京大学出版会, 東京.
- 真砂久哉, 1976. イヌケホシダ その後. 日本シダの会会報, 2(26): 22-23.
- 宮崎 卓, 1992. 多摩丘陵のシダ雑録. 多摩丘陵の植物, (2): 14-15.
- 志村義雄, 1971. シダ植物覚書 (I). 日本シダの会会報, 2(7): 3.

(神奈川県植物誌調査会)

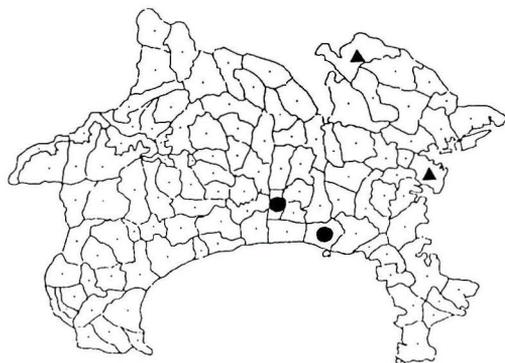


図1. 神奈川県におけるイヌケホシダの分布
(藤沢市川名と南藤沢は同一メッシュ,
▲は筆者は現地未見)

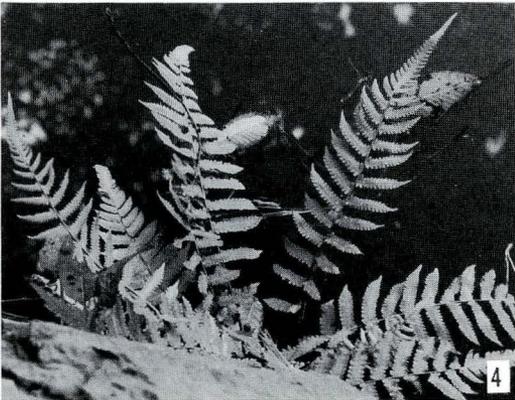
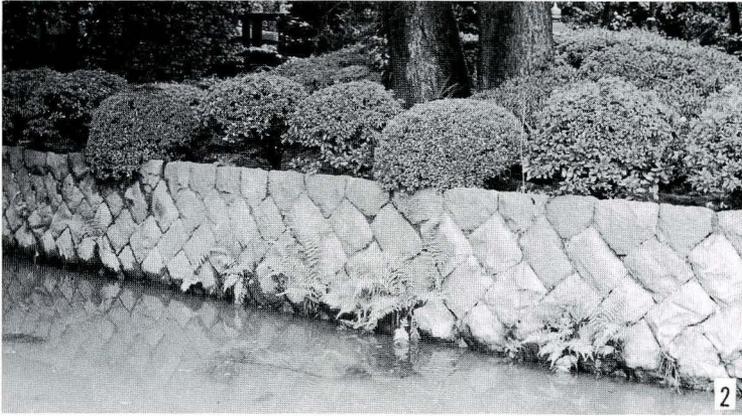


図2. 寒川町宮山神社の自生地 (1993.12.3)

図3. 藤沢市南藤沢の自生地 (1993.11.7)

図4. 寒川町宮山神社のイヌケホシダ (1993.12.3)

図5. 藤沢市南藤沢のイヌケホシダ, 左はタチシノブ (1993.11.7)